# 魔王と従者のものがたり　～またの名を永劫回帰の恋物語～

凪良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王と従者のものがたり　～またの名を永劫回帰の恋物語～

【Ｎコード】
Ｎ３０９８Ｙ

【作者名】
凪良

【あらすじ】
無限、永久に繰り返し、必ず定められたところへ回帰する――――。出会ったのは死臭が立ちこめ屍が折重なる戦場跡。後に魔王となる彼女は、そのときはまだ何も知らぬ姫様だった。魔王となった彼女の傍に付き従う側近となる少年は、戦場に倒れ死を待つのみの戦闘奴隷だった。
――――妙に達観した一風変わった姫様に拾われた少年が、散々に振り回されながら彼女を守り彼女に守られて過ごした日々を回想しつつ、相変わらず振り回されてる物語。

――――シリアスにみせて実は気の抜けたほのぼのコメディです。

## ― prologue ―（前書き）

プロローグなので、登場人物出揃ってません…。

# ― prologue ―

「”勇者”が召喚されました」
報せに、魔王は涼やかな笑顔を見せた。快でもないが不快でもない、透明な笑顔だった。
「そうか、顕れたか」
その笑顔に、傍に控えていた側近は眼帯に隠されていない方の眼を心底嫌そうに顰めた。
見咎めた魔王が、仕方がないやつだと苦笑する。
宥める声で彼女は言った。
「――――時が来ただけだろう…？」
何かを押しつぶして平坦な声で彼は言った。
「――――俺は、認めません」

## ― prologue ―

魔王と呼ばれる存在がある。
いつからそう呼ばれるようになったのかは、知らない。
気づいたらそう呼ばれるようになっていた。
世界の果てと言ってもけっして過言ではない、人の世界からはじ

きだされた魔物たちが身を寄せ合うように暮らしていた森…樹海。
その奥に峻険な谷間がある。
そこには、空を舞うドラゴンも知らねば見過ごしてしまうような小さな集落があった。

その僅か５０戸ほどのちっぽけな集落。
―――そこが魔王の棲み処だった。

「まおうさまー」
「まーおうさまー」
きゃらきゃら、と甲高い子供の声がする。
「おはなー、おはな咲いたのー」
「街へいく約束だよおー」

がたん、と扉が開く。
掠れた声が、いかにもだるそうに言った。
「……うるさいぞ、おまえたち…」
眠そうな若い女が髪をかきあげながら、玄関前に並んだ子供たちを見下ろした。
不機嫌そのものの様子だが子供たちは怯まない。
女が怒っているわけでないことも、不機嫌そうでもいつだってひどく面倒見がいいことも、とっくに知っているからだ。
「おでかけー！」
「しよー！」
「するー！」
「やくそくー！」

約束、と言った子供たちに、記憶をさらうような顔をして
「ああ、そうだった…。花が咲いたらと言ってあったっけな…」
まいったな…、と一人ごちた。

仕方ないとため息を吐くと、
「顔を洗って仕度するからまっていろ。…朝は済ませた？」
元気よく子供たちが、うん！　と頷き、彼女はやれやれと家に引っ込んだ。

＊

「――エレン、エレン。聞こえるかー？」
ごく普通にその場にいる者に話しかけるように、自分以外に誰もいない部屋の中でよそ行きのブーツの紐を編み上げながら彼女が言った。
「エレーン、返事がないなら、いきなり押しかけるぞー？」
『俺の名前はエレンじゃないです！』
「私がやった名前が不満かー？」
『ううぅ…、ちゃんとエイダレンって呼んでくださいっ！』
「うんうん、それで子供４名と私でそっち行くから、場所空けてー？」
『聞き流してるしっ！　――って、ああ、”お買い物の日”ですか？』
「そうだよ、エイダも一緒に行く？」
『エイダも女の名前じゃないですかぁっ！』
「どっちもイヤ？　我がままだなあ」
『もうやだこのひとー』
べそべそしながら、エイダレンが、準備はいいですよと了解の返

事をよこした。
髪を纏めて一つに括る。切り上げようとするエイダレンの努力をひっくり返しつつ、彼女は続けた。
エイダレンはいちいち律儀に反応するので、ついつい構ってしまうのだ。
「あんまり情けないこと言っちゃだめじゃないか、もうお兄ちゃんなんだから」
『――魔王さまが苛めるってハヤテさんとヒサメさんに言いつけてやる…！』
「…二人は忙しいんだから邪魔しちゃダメだぞー」
ちょっと焦りながら、釘をさす。エイダレンの言った二人はなんだかんだと面倒見がいい。説教しにこられては堪らない。
四天王と呼ばれる四強はそれぞれハヤテ、ヒサメ、グレン、ダイチという名前で、魔王が最初に拾った子供たちだ。

この地に落ち着く少し前の話だ。
魔王はまだ魔王と呼ばれていなかったが、滅びた故郷をあとに従者と二人で旅をしていた。
様々な国へ行った。故郷にいた頃、見てみたいと思っていた光景を見て回った。
そしてその何処へいっても、死に掛けて、それでも諦めず足掻く子供を、魔王は放っておけなかった。

まず最初にグレンを拾った。赤い髪をした子供は、泣くと火を喚ぶ災いの子供だと捨てられ乾いて死ぬところだった。
命の気配のまるでない、乾いた砂が続く砂漠でのことだった。
続いてヒサメを氷原の極光の下で拾い、ハヤテを奇岩の岩壁の廃墟で拾った。
そしてこの樹海の奥に転移の失敗で放り出されたと思われる一団の死体のなかで息絶えようとするダイチを拾った。

末期の祈りによる護りの魔法に保護されて、樹海の魔物たちからは護られていたが、それだけで赤ん坊に毛が生えた程度の幼児が生きていけるわけもない。弱弱しい子供を拾い、４人に増えた子供たちを眺めて従者がしばらく難しい顔で考えた結果。

今はもうない故郷で使われていた名前をつけた子供たち、それもひどくイロイロな意味で悪目立ちするのを４人も連れて、旅を続けるのは無理だとなった。

周辺にいいところはないか探し、ここに落ち着くことにした。

その後も彼女が一人で出かけると必ずと言っていい頻度で子供を拾って帰るので、ここしばらくは一人で出かけないようにと従者から厳命されてしまった。

もっとも、ものぐさなので、年に２度か、３度も出かければ充分だと彼女は思っているのだが、どうにも昔から従者に信用がないのである。

特にいま、従者のみならずハヤテたちまでピリピリと神経質になっているので余計な心労はかけたくない、のだけれど。

『そういえば、コウ様は戻られてるんですか？』

「いや？　そういえば、まったく帰ってくる気配がないなあ」

『えええ？！』

「まあその話はあとにしよう」

『ちょっ！　魔王さまっ！？』

扉の前で座り込み地面に棒切れで絵を書いて遊んでいる子供たちを招き入れると

「”３５番目の子のもとへ転移”」

バタンと閉じられた扉とほんの僅かな揺らぎを残して、彼女は子供たちごとかき消えた。

## ― prologue ―（後書き）

念話：相手を思い浮かべて話しかける魔術。受ける側は呼ばれている気がしたらチャンネルを合わせるようにして会話できる。使用者のレベルに依存して会話先が、家族や身内、知人や顔見知り、知らない人、不特定多数、と変化していく。

転移：行ったことがある場所、あるいは知っている人（原則では魔術的なつながりが必要）を目印に場所を転移する魔術。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3098y/

---

魔王と従者のものがたり　～またの名を永劫回帰の恋物語～

2011年11月7日08時17分発行